

標 題

宍道湖西岸地区大区画ほ場整備に係る営農支援活動 その3
～「出雲産小豆」の種まき完了・出芽は概ね良好・収穫量2ト超えを目指す！～

(ダイジェスト)

米依存からの脱却を目指した大区画ほ場整備後における高収益作物として、小豆の産地化に取り組む宍道湖西岸地区農村整備推進協議会では、7月19～22日、地区内4農事組合法人のほ場で計220aの出雲産小豆の播種が完了しました。干ばつや7月29日の台風被害も心配しましたが出芽が概ね揃い生育は順調です。収穫量2ト超えを目指して関係者一丸となって取り組みます。

宍道湖西岸地区農村整備推進協議会（多久和修一会長、農家数626戸、整備面積456ha）は、出雲産小豆の良質安定多収技術の早期確立を目指して、7月19日、農事組合法人ヨコハマの水田4筆計1haで、（社）全国農業改良普及支援協会及び（株）クボタの協力を得ながら「出雲産小豆の播種目合わせ会」を開催しました。当日は、地区内の生産者約30名をはじめ、地元産小豆による地域活性化を研究する島根県立平田高等学校生徒40名や島根大学の教員や学生、赤飯を製造販売し全国展開している実需者等約120名が参加しました。

今回の目合わせ会では、①湿害を回避するため耕起同時播種とする ②表面排水により湿害を軽減させるため畦幅は2～4m程度とする ③収穫時期をそろえるため密植栽培（条間30cm×株間20cm）とする ④播種の深さは3cm程度、10aあたり播種量は6kg程度とすること等を申し合わせました。

梅雨明け以降の干ばつや7月29日の台風被害を心配しましたが、出芽が概ね揃い、生育は今のところ順調です。

出雲普及部では、関係機関と連携しながら良質安定多収のための栽培技術支援と販路確保を積極的に行い、平成30年度目標の10aあたり収量100kg以上、全体で2ト超えと地元消費の実現を目指したいと考えています。



耕起同時播種機による種まき及び平田高生徒による種まきの様子(7月19日、農事組合法人ヨコハマほ場)



播種10日後の出芽の様子(7月28日、農事組合法人ヨコハマほ場)